

# 1880 年前後における マーク・トゥェインの日本

高島真理子

## —要旨

トゥェインの日本への関心は、日本で記者活動を続ける友人・エドワード・H・ハウスとの文通が 1870 年代後半途絶えたことにより進展することはなかった。トゥェインがヨーロッパから帰国後の 1879 年にもハウスからの手紙はなかった。しかしハウスはこの間トゥェインに代わって、ハートフォードの牧師トウィッチェルとの通信を続けている。ハウスは、1879 年夏に世界一周旅行で日本を訪問したグラント將軍の案内役も務め、その記事も書いている。トゥェインの日本への関心が新たな展開を示すのは、1880 年夏に日本から若い日本人の養女を伴って帰米したハウスとの再会からである。そのことは、1880 年のクリスマスに描いたハートフォードの隣人・スーザン・ワーナへの絵（手紙）に読み取ることができる。原画「エジプト逃避途上の休息」のパロディー画であるこの絵は、*A Tramp Abroad* の口絵“TITIAN'S MOSES”の取り組みを通して得た彼の絵画技術の応用としての表現と捉えることも可能である。口絵のテーマである旧約聖書の「モーセと葦」は、トゥェインが作家になる以前からの関心事でもあり、1866 年のニューヨークの雑誌にこの逸話をめぐる 8 歳の姪のアニーとのやりとりを發表している。その 10 年後の 1876 年夏に執筆が開始された『ハックルベリー・フィンの冒険』の第 1 章では、聖書を読み聞かせるダグラス未亡人の言葉を、ハックはアニーの方言の葦（“the bulrushers”）と聞き取る。さらに第 11 章の冒頭に付けられた女装のハックの挿絵は、*A Tramp Abroad* (1880) の口絵の「モーセ」を想起させる。1880 年前後のトゥェインの日本への関心は、クリスマスに描いたスーザンへの絵手紙に関連したことの中にその多くを読み取ることができるのである。

## はじめに

本「紀要」第 20 号では、1860 年代末に帝国日本芸人一座の公演を見て以来、トゥェインの日本への関心が 1870 年代にどのように進展していったかを考察した<sup>(1)</sup>。彼が 1871 年に出版されたミットフォードの *Tales of Old Japan* (『古き日本の話』) の初版本を入手していたことも、日本への関心の一端を示すものである。

本稿では、絵画の勉強も目的であったヨーロッパ滞在中から取り組んでいた旅行記

*A Tramp Abroad* (1880) (以下 *TA*) 出版に向けての主に挿絵の作業に忙しかった、1880 年前後の時期に焦点を当てる。第 1 節では 1880 年クリスマスに送った *The Gilded Age* (1875) の共著者である Charles Duddley Warner (1829-1900) の妻 Susan L. Warner (1831?-1921) への絵手紙との関連で Edward H. House (1836-1904) との交遊の問題を検討する。第 2 節では、*TA* の口絵と聖書の、「モーセと葦」にまつわる『ハックルベリー・フィンの冒険』(以下 *HF*) の第 1 章と第 11 章の挿絵におけるトウェインのパロディー嗜好について考察する。

## 1. Edward H. House との友情の翳り

### —Susan L. Warner への絵手紙に描かれたスフィンクスの謎

1880 年のクリスマス (12 月 25 日) に、トウェインはハートフォードの隣人で *The Gilded Age* (1875) の共著者である Charles Duddley Warner の妻 Susan L. Warner 宛に絵手紙を送っている (MTLE 5: p.239)。クリスマスのプレゼントやカード、サンタクロースといったこと以外に宗教的な関心のない者は、同封のトウェインの絵「図 1」からは、きつねにつままれたような奇妙な印象を受けるであろう。けれども、歩いて訪問できる距離に住むハートフォードの隣人であるワーナー夫人・スーザンに、クリスマスを共に祝うために、トウェインがわざわざこのような絵手紙を書いたことにはそれなりの意図があったはずである。彼女にトウェインが伝えたかったこととは手紙に同封の自筆の絵にあると考えてよいであろう。絵に隠されているトウェインのメッセージを読み解くことにより、スーザンがちょっとした笑いをもって、この謎めいた絵を鑑賞できることを期待して、彼は絵手紙を出したと思われる。

まずはトウェインの絵の奥に潜むものを探るために、「絵」(「図 1」) と照らし合わせつつ以下の手紙部分から考察してみたい。[手紙の文中の (A) ~ (E) や破線は便宜上引用者が付けたものである]

FARMINGTON AVENUE, HARTFORD.

Xmas, 1880.

Dear Mrs. Susie:

I beg to enclose to you one of my works, along with the compliments & good wishes of the season.

This work is not as satisfactory a success as I had hoped to make it — it fails of exactness in places. (A) I have thrown a Japanese cast around the Sphinx, in deference to the art-taste of the day. (B) Brer Joseph was very difficult to do. I did as well as I could, ~~with him~~ but am dissatisfied with him, because he does not lay still enough. He interrupts the repose of the picture. (C) I was obliged to hump up the mule that way in order to get him in; but if I had had room I could have made him

better. (D) Would you mind explaining to friends that the Sphynx is neither a gorilla nor a Lord Chief Justice of the Queen's Bench, but only just a simple Sphynx?

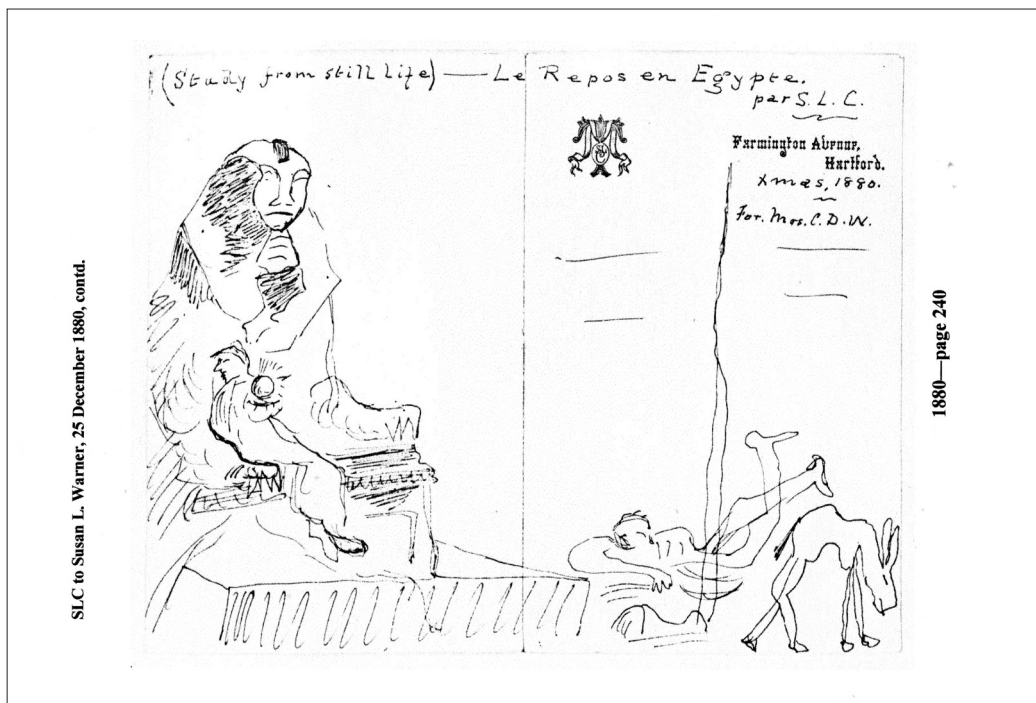
Merry Christmas!

Truly Yours

S.L.Clemens

クリスマスの挨拶のあと、トウェインは「この習作はあちこちに正確さを欠くもので、自分の望んでいたものほどの出来栄ではなく、満足はしていない」としたあと、破線部 (A) の「今日的芸術趣向に敬意を払いスフィンクスに日本的な装いを施した」と解説している。それは、「図1」をよく見ると分かるように日本の武士を想起させるスフィンクスの頭部のちょんまげと兜や鎧のことである。これらについてはトウェインの所有するミットフォードの『古き日本の話』に付けられた何葉もの日本人版画師の挿絵を参考にしたことは大いに考えられることである。また、とくにちょんまげについては、1867年5月にニューヨークで日本人軽業師たちの公演を見たことも絵を描く際の助けとなっていたに違

図1 (MTLE 5:p.240)



(Study from Still Life) — Le Repos en Egypte.  
par S.L.C.

(静物画の習作) — エジプト途上での休息  
S.L.C.より

Farmington Avenue,  
Hartford  
Xmas. 1880.  
For Mrs. C.D.W.

いない。彼は日本人曲芸団「帝国日本芸人一座」のマネージャー（後見人）のスピーチに感動した記事をサンフランシスコのアルタ紙に送っている<sup>(2)</sup>。トウェインにとって、この一座の後見人・高野宏八のまげを結ったままの姿は深く心に刻まれていたであろう。

破線部 (B) の Brer Joseph については、Brother Joseph とはせずに南部黒人訛りの“Brer”を用いている。それは、この頃のトウェインは Joel Chandler Harris (1848-1908) の *Uncle Remus* (1880) (『アンクル・リーマス』) を耽読していたことによる。この作品に登場する動物たちが“brother”にあたる南部黒人訛りの“brer”を使って、“Brer Rabbit”, “Brer Fox”と呼び合っているのを真似ているのである。トウェインは友人の出版者である James R. Osgood (1836-1892) へは、“Brer Osgood”をよく用いた手紙を書いている。また、クリスマス・イブに書いた、*Sunday School Songs* (1869) (『日曜学校の讃美歌集』) の著作もある Edwin Pond Parker (1836-1920) への手紙には“Ole Brer Twichell”の名前がはっきり示されている (MTLE 5: p.236)。

破線部 (B) の「ジョーゼフ修道士は、できる限り努力して描いたのですが、彼には満足していません。あまりじっとしていてくれないのです。彼は絵にあるべき平穏な休息を妨げています」という解説から Brer Joseph (「ジョーゼフ/ヨセフ」) は牧師でファースト・ネームが Joseph であることから「修道士ジョーゼフ」、すなわちハートフォードのアシュラムヒル教会の牧師、(Joseph Hopkins Twichell) のことである。トウィッチェルはトウェインの親友であり、二年前の夏に自分が費用をもつとしてドイツ、スイスの徒歩旅行へ誘い、共に旅を楽しんだだけでなく TA にも Harris の名前で登場し活躍する人物である。

絵手紙を読んだスーザンは、Brer Joseph がトウィッチェルだとすぐ分かったであろう。とくにトウェインは、トウィッチェルがトウェインとの徒歩旅行を終え帰国した 1878 年冬に、トウィッチェルとスーザンの連名宛でジュネーブから手紙を出している。けれども、ここには、あとで述べるようにもっと深い意味が潜んでいる。それが何であるのかを知るには、手紙には解説されていない、絵の中の Brer Joseph が胸に抱いている「輝く球」やスフィンクスの両足のあたりにあるものが何であるかを想像する必要がある。また、破線部 (D) にあるように、トウェインがスーザンの友人たちに伝えてもらいたいこと——「スフィンクスはゴリラでも英国高等法院首席判事でもなくただのスフィンクスなのです」というまさに謎めいた文の意味することを考える必要がある。

破線部 (C) の「絵に取り込むために、らばの背中を丸めざるを得なかった」という解説は、“Still Life” (静物画) ではなく風景画は苦手で、らばを上手く画面に入れることができないという、絵の勉強中でもあるトウェインの弁解のようにも読める。この文は、トウェインのベストセラーにもなった旅行記第一作 *The Innocents Abroad* (1869) のエジプトでのトウェインとらばの旅も想起させる。

ここまでの絵の解説と「図 1」を再び見直すと、この絵は単なる漫画のようにさえ思える。だがトウェインは、明かに聖書にあるキリスト降誕にまつわる「エジプトへの逃避」を念頭に置いていたのである。彼はパリに滞在中の 1879 年 5 月初旬に見た、フランス人

画家 Lue Olivier Merson (1846-1920) による“Le repos pendant la fuite en Égypte”〔エジプト逃避途上の休息〕(〔図2〕)のパロディー画を描こうとしたのである。それは、自分の絵の画題に“Le Repos en Egypte.”とフランス語を用いていることから分かる。N & Jの記載にあるように、彼が見たのは、おそらく5月初旬のこの作品が出品されたサロンの一般公開の前の“Private View”の時ではないかと思われる<sup>(3)</sup>。

メイソンの画題“Le repos pendant la fuite en Égypte”〔エジプトへの逃避途中での休息〕は、新約聖書に書かれているキリスト降誕にまつわるよく知られたマタイ伝：2章13~16節の逸話—イエス誕生後のヨセフとマリアのエジプト逃避の旅をモチーフにしている。聖書には、予言者たちから救世主が生まれたと知らされたヘロデ王が、ベツレヘム周辺の「生まれた男の子は一人のこらずナイル河へ放り込め。女の子は皆、生かしておけ。」という命令を出したことが記されている(旧約聖書「出エジプト記1：22」)。そしてこのとき、ヨセフ(Joseph)は夢で赤児のイエスを連れてエジプトへ逃げるようにと告げられ、マリアを伴いエジプトへ向かうのである。スフィンクスにもたれて赤児を胸に抱いて眠っているような人物はマリアであり、毛布に包まっているため誰であるかわからないが、砂地に横たわっているのはヨセフ、そして彼の脇には何かを食べているらばがいる。

メイソンのこの絵が2009年に日本の横浜美術館で展示されたときのカタログ『フランス絵画の19世紀』の説明によれば、このモチーフは伝統的な画題ではあったが、スフィンクスを登場させた画家はそれまでいなかったということである。またこの作品が発表後にもたらした当時の反響については、次のような解説がある。

図2 Luc-Olivier Merson の“Le repos pendant la fuite en Égypte” (1879)



古代エジプトの神と新しい時代の救世主という、このエキゾチックで一見奇妙な組み合わせは、1879年のサロンに発表した当時熱狂的に迎え入れられる。その影響は絵画のみにとどまらず、しかも範囲は国境を越えて広がっていった。…中略…いずれにせよ、この《エジプト逃避途上の休息》は、発表後すぐ人口に膾炙することとなり、メイソンの成功をいっそう強固なものにしたのである。

(図録『フランス絵画の19世紀』198頁)

(破線は引用者；この展示会で利用した1880年のものは、島根県立美術館蔵)

トウェインが1879年のサロン出品の作品を見たであろうことは、絵手紙の背を丸めたらばの絵の筆遣いやTAの自筆の挿絵(p.123)「図3」と以下に示したこの挿絵の解説文の破線部(D)にも見ることができる。以下の破線部(A)、(B)、(C)はスーザンへの手紙の多少言い訳めいた“This work is not as satisfactory a success as I had hoped to make it -- it fails of exactness in places.”とよく似た内容である。

I made a sketch of the turnout. It is not a Work, it is only what artist call a “study” —a thing to make a finished picture from. (A) This sketch has several blemishes in it ; for instance, the wagon is not traveling as fast as the horse is. This is wrong. Again, the person trying to get out of the way is too small; (B) he is out of perspective, as we say. The two upper lines are not the horse’s back, they are the reins;—there seems to be a wheel missing—this would be corrected in a finished Work, of course. That thing flying out behind is not a flag, it is a curtain. That other things up there is the sun, (C) but I didn’t get enough distance on it. I do not remember, now, what that thing is that is in front of the man who is running, but I think it is a haystack or a woman. (D) This study was exhibited in the Paris Salon of 1879, but did not take any medal; they do not give medals for studies.

(TA, pp.122-23)

ピラミッドと並びエジプトの象徴である「頭は人間で胴体は動物」のスフィンクスには、通りがかりの人に謎をかけ、それに答えることができないものを殺してしまうという恐ろしい伝説もある。では、トウェインの「図1」に描かれた「スフィンクスの謎」とは何であろうか。

謎解きのヒントは ①ジョーゼフ修道士(=トウィッチル)が大事そうに胸に抱いているものは何なのか？ ②スフィンクスが両足を載せているものは何なのか？ ③トウェインはスフィンクスになぜ日本的装いを施したのか？ に答えを出すことである。

①については、もちろんメイソンの絵にある赤児のイエスではない。トウィッチェルにとって大切なもの、それは1880年のこの時期、彼が最も心を痛めていた Chinese Educational Mission ——中国政府と協力して十代の中国人少年をアメリカに招き約15年間アメリカでの学校教育を提供する運動(以下、CEM) ——に関することである。トウィッチェ

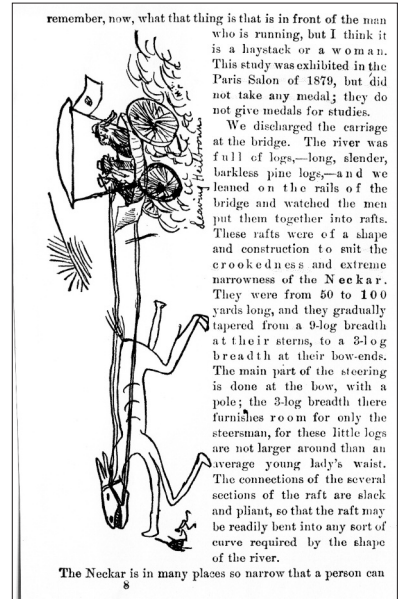
ルの教会員でエール大卒の Yung Wing (1828-1912) が中心となって始まったこの運動は、アシュラムヒル教会を CEM の本部とした。この活動を支援するトウィッチェルにとって、CEM の中国人留学生たちだけでなく、1873 年以来トウィッチェルが留学の世話をしたハウスの教え子の日本人青年たちも、絵の中の Brer Joseph (=トウィッチェル) が胸に大切に抱き輝いているもの(事)と考えることができる。

トウェインは 1873 年、ハウスが一時帰米の折に連れてきた二人のアメリカ留学を希望する青年らの一時的な宿としてハートフォードの自宅を提供している。一方ハウスは、1870 年代後半には二人の日本人留学生のことで、トウェインに代わってトウィッチェルへ何度も手紙を出したり、CEM 活動や中国との問題に関するトウィッチェルの論文を自らが発行する週刊英字新聞 *Tokio Times* に掲載している<sup>(4)</sup>。トウィッチェルが大事そうに胸に抱いているものは、ハートフォードを本部とするトウィッチェルの教会が支援してきた CEM 活動や彼の世話でトウィッチェルの教会員宅に下宿させてもらい高校生活を送った日本人二青年の箕作佳吉と小島憲之らのシンボルと捉えることが可能であろう。

1872 年から順調に進んできた CEM の活動は、10 年目を目前にして、アメリカでの中国人移民の排斥運動の高まりや中国の外交政策の変更で中止を迫られる状況に直面していた。このことは、CEM の開始時期からトウィッチェルから様々な話を聞き<sup>(5)</sup> この活動の成り行きを見守ってきた親友のトウェインにとっても同様の心配事であった。トウェインは 1880 年 12 月 21 日にこの件の解決を求めて、ニューヨークでのグラント将軍との会見を計画したのである。グラント将軍は 1879 年に世界一周旅行で中国を訪問した際、中国の Li 総督とも会見し、中国首脳に大きな影響力を持つ人物であることをトウェインは心得ていた。このクリスマス直前の 12 月 21 日、ニューヨークでのトウィッチェルを伴ってのグラント将軍との会談において、グラント将軍からは、中国首脳の Li 総督にトウィッチェルの CEM 活動を継続させるための働きかけをしたい、という快諾を得たのである。

②、③の答えは相互に関連している。②の答えは、「日本的」な装いをさせたスフィンクスが奏でているもの、それは日本の伝統楽器である琴と見ることができる。琴(Koto)は、この年 1880 年の夏に帰米したハウスが連れてきた日本人の養女の名前でもある。ではトウェインはいつ頃ハウスの養女の名前が“Koto”であることを知ったのであろうか。また、当時トウェインが日本の伝統楽器・琴の弾き方を知っていたとすれば、何からその情報を得たのであろうか。前者については、ハウスと共通の友人であった David Gray の妻 Martha

図3 (TA p.123.)



からの9月14日付のトウェインへの手紙の中に二十代の若い日本人の養女 Koto の名が記されている。マーサは、夏に日本人の養女・琴を伴って帰米したハウス達が、バッファローのグレイ宅を訪れたことを、“We had a delightful little visit from Mr. House and Miss Koto.”と記述している<sup>(6)</sup>。それ故、トウェインはクリスマス以前にハウスの養女の名前が Koto であるのを知っていたと思われる。

スフィンクスの足元の琴 (Koto) の弾き方については、トウェインが理解していたことを示すはっきりした記録は残っていない。だが、おそらくトウェインは、書斎に残るミットフォードの *Tales of Old Japan* (1871) vol.2 にある解説や、蔵書にはないがエメエ・アンベールの *Le Japon illustré* (1870) vol.1 にある1頁大の挿絵を見て琴の弾き方についての知識を得ていたことは大いに考えられよう (*Le Japon illustré* の翻訳書『絵で見る幕末日本』の268頁の上半分には「図4」の挿絵がある)。

日本の<sup>アルファ</sup>豎琴、琴は、大きさが一定していない。フェチス氏の言葉によれば、長さ0.64メートル、幅0.09メートルのものから、長さ1.90メートル、幅0.25メートルのものまである。十三本の絃があり、楽器の両端で張ってある。この楽器を演奏するためには、象牙でできている人造の爪を右手の三本の指にはめればよい。

三味線と琴は民衆の最も愛好する楽器で、新婚花嫁の必需品になっている。

(エメエ・アンベール 茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』270頁)

この年の夏に琴を伴って帰米したハウスとは、トウェインは10月のハートフォードで開催予定の共和党大会にグラント将軍を招待する件でボストンへ出向き会っている。おそらく William Dean Howells (1837-1920) も交えてボストンでハウスに再会したこの時、ハウスが若い日本人女性を養女にした背景を聞いていたと推測できる。ハウスはピアノの名

手であることから日本の伝統楽器の琴の弾き方や、結婚に失敗した琴をハウスが養女にするにあたって、実父・青木信寅はこの養子縁組にとくに反対はしなかったことなども、ハウスから聞いていたと考えられる。琴の実母は彼女が幼少のとき他界しており、実父・青木信寅は明治初期の東京の裁判官(判事)であった<sup>(7)</sup>。このことは、奇しくもスーザンへの手紙の破線部(D)「英国高等法院主席判事で

図4 「歌手と楽人」(『絵で見る幕末日本』268頁)



歌手と楽人



もなくただの「スフィンクス」という記述に示されているのではないだろうか。

スーザンへの絵手紙の解説 (D) の英国高等法院首席判事という肩書は、ハウスの親しい英国に在住の親戚のことをよく知るトウェインの、読み手を煙に巻こうとする彼流の思いつきの「嘘」ではないだろうか。けれども、ハートフォードの隣人であり、トウィッチェルの教会員でもあるスーザンは、1873年にハウスが一時帰米したときに連れてきた、留学を希望する二人の日本人の青年たちとハウスはトウェイン邸に滞在したことやその後二人はトウィッチェルの世話になっていたことなどよく知っていたと思われる。またトウェインはスーザンには、前に示したようにヨーロッパ旅行中の1878年にジュネーブからトウィッチェルと連名宛で“music box”のことで手紙を出しているし<sup>(8)</sup>、彼女はこの地域の素人のピアニストとして最も優れていた人物であるだけでなく、絵画においても雑誌に挿絵を投稿するイラストレーターでもあったことをトウェインは知っていたことでもあろう<sup>(9)</sup>。そのため、スーザンはこの絵を笑いをもって解釈できたであろう。

このように考えると、トウェインは1880年夏に若い日本人の養女を伴って突然帰国したハウスをスフィンクスに見立てたと言えるであろう。また、トウィッチェルがスフィンクスにもたれかかっているように描いたのは、トウィッチェルが大事にしているものが、ハウスの影響下にあることを暗に示したかったからである。1870年代後半の時期、ハウスはトウェインに代わって、二人の教え子の留学の下宿先その他の世話に当たってくれたトウィッチェルに、二人の将来を危惧する手紙を日本から何度か出している。それだけでなく、トウィッチェルには、ハウス自身が編集する週刊英字新聞 *Tokio Times* の冊子を日本から1年以上にわたって送っている。トウィッチェルは、これらのことへの返事として、1879年6月には *Tokio Times* の冊子を前年からずっと送り続けてくれていることへのお礼やハウスの二人の教え子たちの現況を知らせる手紙を出している。この手紙の中でこうしたハウスの厚意を受けて、自分は日本への共感を非常に感じるようになり、大変な日本びいきにもなっている (“a great deal of Japanese patriot of me”) とも述べている<sup>(10)</sup>。

一方トウェインは、ヨーロッパから帰国後の1879年11月にはシカゴでの退役軍人の会に招かれたグラント将軍へのスピーチを通して、将軍を喜ばせている。この時から約1年後の1880年10月にトウェインはハートフォードでのグラント将軍を歓迎する会を計画した。グラント将軍を迎えるにあたって、9月には先に見たようにハウエルズも同伴でボストンでハウスと会っている。トウィッチェルの抱える CEM 活動の継続のためグラント将軍の力を借りたいことがあり、ハウスからグラント将軍に関する情報を得ることが目的であったと思われる。

ハウスは1870年代の約10年間の日本滞在中、ジャーナリスとしてだけでなく英語教育にも携わっている。また1877年には大隈重信の援助のもと自らが編集・発行する週刊英字新聞 *Tokio Times* を発刊し、アメリカにおける南北戦争(1861-1865)時の連邦総司令官であったグラント将軍の1879年夏の日本訪問時には、東京での将軍の案内役も務めた。そのことは、7月5日の“The Arrival of General Grant”に始まり、その後は7月12日、19日と

毎週“General Grant in Japan”と題した記事に記されている<sup>(11)</sup>。しかし、トウェインにとっても最大の関心事であった、日本でのグラント将軍とのことを知らせるハウスからの手紙は1通もない。これに反してハウスは、前述のようにトウィッチェルへは1870年代末に手紙と一緒に何部もの *Tokio Times* の冊子を送っている。日本のハウスからトウェインへの音信は、1880年夏に日本人の養女・琴を伴って帰米する時まで全くないのである。

1880年夏に帰米後もハウスはシカゴのグラント将軍邸を琴とともに訪れ、親交を深めていた<sup>(12)</sup>。これらのこともトウェインはある程度把握していたのではないだろうか。そして、クリスマス直前の12月21日のニューヨークでのトウィッチェルを伴ってのグラント将軍との会見を計画した。この会見において、将軍からCEM継続のために尽力するという、予想以上の快諾を得たのである。

以上①～③の謎解きの答えと、破線部(A)「今日的芸術趣向に敬意を払いスフィンクスに日本的な装いを施した」という解説の「今日的」という点に注目することで、トウェインが描いたスフィンクスは、この年の夏に日本から突然帰米したエドワード・ハウスであることは明らかである。謎解きをとおしてトウェインは、ハウスは友人として人間的に少し問題を感じさせる「謎の人物」であることを、言葉で直かに伝えるのではなく、笑いをもってハートフォードの親しい隣人ワナー夫人に知らせたかったのであろう。

## 2. TAの口絵と「モーセと葦」をめぐるHFの挿絵における トウェインのパロディー画への試み

クリスマスのスーザンへの絵手紙で、トウェインがフランスの画家メイソンのパロディー画をいともたやすく描けた背景には、1880年初夏に出版された、TAの口絵(「図5」)への取り組みがあったことを忘れてはならない。キャプションに“TITIAN'S MOSES”とある口絵は、15・6世紀に活躍した巨匠ティツィアーノの絵画に詳しい読者は、キャプションへの疑いを禁じ得ないものであろう。それは当を得た反応である。この絵はティツィアーノの絵ではなく、上半分は「ジェーン・グレイの処刑」で名高いフランスの画家 Hippolyte (Paul) Delaroche (1797-1856) が1853年に描いた油絵であり、その木版画が1865年出版の雑誌 *The Sunday at Home* の“The Finding the Moses”の挿絵“MOSES IN THE ARK OF BUL-RUSHES”(「図6」)として使われた<sup>(13)</sup>。下半分は、漫画家による女兒とも見えるモーセの絵が貼り付けられたものである。下半分の操作についてトウェインは、TA出版を手がけるアメリカン・パブリッシング社の Francis E. Bliss に1879年6月10日に次のような指示をパリより送っている。

It is a thing which I manufactured by pasting a popular comic picture into the middle of a celebrated Biblical one—shall attribute it to Titian. It needs to be engraved by a master. (MTLE 4: pp.71-72)

TA 出版を前にした 1880 年 3 月にはトウィッチェルへも、この口絵の操作について知らせる手紙を書いている。

… & the frontispiece is the combination which I made by pasting one familiar picture over the lower half of an equally familiar one—this fine work being worthy of Titian, I have shed the credit of it upon him. (MTLE 5: p.45)

TA の最終章でトウェインは、Titan (ティツィアーノ 1477?-1576) の“MOSES”(モーセ)を見るために、フィレンツェのウフィツィー美術館を訪れ、この「不朽の名作 (“this immortal Moses”)」の最後の展示を鑑賞する幸運を得たと述べている。さらに現在この絵は、盗難を避けるために“a more private and better protected place”(「より個人的でより保管のよい場所」)へ移設されたため、ここでは鑑賞できないとしている。だが、読者は TA の冒頭にある口絵にもどり巨匠の絵を楽しんでほしい、とわざわざアスタリクス (\*) を付けて口絵の存在を強調しているのである (TA, p.580)。

最終章では、この口絵の操作について、トウェインは、Dorè [Paul] Gustave (1833-1883) の画集の彫刻師 Pannemaker が自分のためにその彫刻を施してくれたと次のように追記している。

図 5 TA 口絵 “TITIAN'S MOSES”

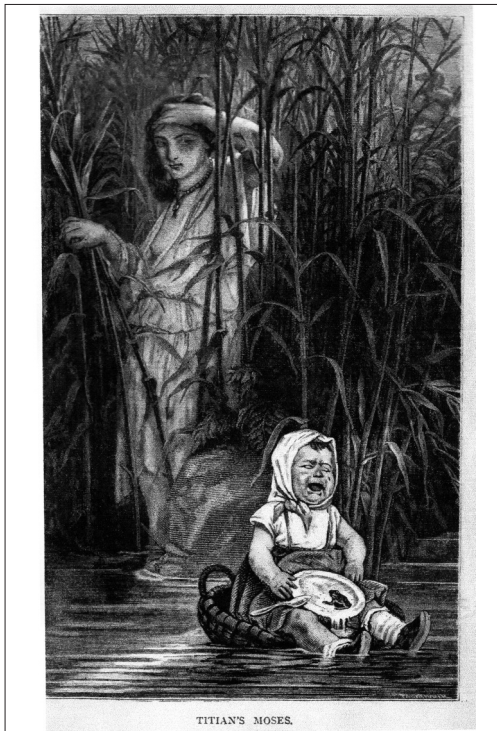


図 6 “MOSES IN THE ARK OF BULRUSHES”



I got a capable artist to copy the picture; Pannemaker, the engraver of Dorè's books, engraved it for me, and I have the pleasure of laying it before the reader in this volume.\* (TA : 579-80)

TAの口絵では、「図5」の右下に薄い白抜き文字の彫刻師 Pannemaker の名前が確認できる。Dorè の Bible の挿絵を多く手がけた彫刻師 Pannemaker と Evans による「図6」の原画は、上記の Paul (properly, Hippolyte) Delaroche が描いたもので、籠に載せてナイル河に流されたモーセの行方を背後の葦の藪からじっと見守っているのは、モーセの姉ミリアムである。TAの口絵の幼児モーセはドラローシュの籠に載せられた赤児のモーセとは明らかに異なっている。とくにこのモーセを女装させているところに、ヘロデ王の男児を殺害するという通告から逃れるための偽装の試みを見ることができる。さらにこの幼児が身に着けているものからは、聖書の時代ではなく現代を感じさせる。口絵のモーセは聖書の「モーセと葦」の逸話の赤児の年齢より少し大きくなった子供のモーセであり、口絵の“TITIAN'S MOSES”の泣き叫んでいるモーセは女装しており、お皿にはカエルが跳び載っている。こうしたことは、絵全体に不協和音を生じさせると同時に、このチグハグな印象から「笑い」が生み出される。さらに口絵のモーセが手に持っているお皿の上のカエルは、トウェインの作家としてのデビュー作の短編“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” (1867) の「飛びガエル」を想起させる効果もある。

読者は何葉かの“MT”というトウェインの署名入りの挿絵を目にしながらか TA を読み進むなかで、TAの最終章では、フィレンツェのウフィツィー美術館にあるティツィアーノ作の二枚ある裸体の「ヴィーナス」の一枚についての彼の酷評を知ることになる。トウェインはこのヴィーナスは、彼女の腕と指の描写において「世界で一番下品で、淫らで、猥褻な絵 (“the foulest, the vilest, the obscenest picture the world possesses” TA, p. 578)」であり、この絵は売春宿用に描かれたものであると指摘する。さらには、誰もこうした点には異を唱えず、巨匠ティツィアーノを賛美しているとして、そうした人々の愚かさを非難する。そしてこの時、この作品の冒頭に示された“TITIAN'S MOSES”という1頁大の口絵の重要性に気づかされるのである<sup>(14)</sup>。

TAの口絵“TITIAN'S MOSES”のテーマである、ヘロデ王が男児殺害の命令を出したことに関連した旧約聖書の「モーセと葦」の逸話は、トウェインにとっては記者活動や作家としてデビューを果たす以前からの長年の関心事であった。1862年、アメリカ西部の金・銀発掘で一攫千金を夢見て滞在していた銀鉱山の町 Carson City から母 (Jane Lampton Clemens) に送った手紙には、トウェインの姪にあたる当時8歳の姉 Pamela の娘 Annie (1852-1950) にこの逸話をからかいの種として使ったことが書かれている。母との手紙のやりとりで姪のアニーから次のような「叔父トウェイン評」を聞くのである。

「トウェイン＝サム叔父さんに聖書の『モーセと葦』の話を聖書に書かれているとおりに一生懸命説明してもサム叔父さん (Uncle Sam) は少しも理解してくれない。叔父さんは

『自分が知っている老人のモーセはマーケット・ストリートで洋服屋を営んでいる人では?』(“that I [SLC] knew old Moses himself—and that he kept a clothing-store in Market Street?”) というばかりで、叔父さんは何も学ぼうとしない頭の鈍い (“dull” な) 人だ。」そして彼女は、母・パメラの所へ行きサム叔父さんの将来を心配するのである。(“... and said she [Annie] didn't know what would become of her uncle Sam—he was too dull to learn anything—ever!” MTL 1:180)

トウェインの姪アニーとのこのエピソードは、1866年に New York *Weekly Review* 誌に “An Open Letter to the American People.” と題して発表されている。このエッセーの出だしは、“Uncle Mark, if you was here I could tell you about Moses in the Bulrushes again, I know it better, now” (HF, “EXPLANATORY NOTES,” p.382.) である。さらにこの「モーセと葦」をめぐるやりとりは、約10年後の1876年夏に執筆が開始された *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) (以下 HF) の第1章に形を変えて使われることになる。HF 第1章でハックは Douglas 未亡人が読み聞かせる聖書の「モーセと葦」の話に耳を傾ける。しかし、ハックはモーセは偉い人かもしれないが、ずっと昔に死んでしまった人なので、自分は死んでしまった人には興味がない、として聖書への関心を否定するのである。

HFの挿絵(「図7」)のキャプションに使われている ‘BULRUSHERS.’ は川辺に繁茂する葦 (bulrushes) のことである。語尾の “-er” は綴り間違えではなく *Weekly Review* 誌で示したアニーの言葉遣いに現れた方言そのままである。けれども、同じ言葉を HF 第1章に用いたトウェインの意図は、もう少し深い意味があったのではないだろうか。

*The Adventures of Tom Sawyer* (1876) (以下 TS) の発表の後1876年夏の約1カ月程の間に一息に書かれた HF の第1章から第18章までは、TSに描かれている子供の遊びの延長線上にあるようなものとは全く異質の、いわば人生そのもののような “Adventures” である。このような HF のハック像の背後には、逃亡奴隷との旅という重いテーマがある。そしてこの旅には、多くの批評家が指摘する旧約聖書の「モーセと葦」の逸話が、音楽のライト・モチーフの効果をもってハックの旅を支えている<sup>(15)</sup>。

旧約聖書の「出エジプト記」と HF とは、聖書の「モーセ」とパラレルな関係がある。聖書のモーセは葦の方船 (ark) に隠されてナイル河に置かれるがファラオの王女に河から引き上げられたことで難を逃れた。これに対して、HF のハックは自分の息子を虐待し、大酒飲みで人種差別主義者のパップ (pap) から、殺されたふうを装って、Miss Watson の奴隷であった Jim と共に自由州への脱出を目指してミシシッピ河の旅に出るのである。

図7 LEARNING ABOUT MOSES AND THE “BULRUSHERS.” (HF p.2.)



LEARNING ABOUT MOSES AND THE “BULRUSHERS.”

HFの第1章において「図7」のように、ダグラス未亡人から「モーセ」の逸話を聞いているハックは、モーセと自分は関係ないと聖書を否定する。しかしこのエピソードを示す「図7」からは、ハックは未亡人の読んでくれる聖書の話に聞き入っている様子が見えがえる。

本文同様この挿絵のキャプションにおいては、聖書の葦“bulrushes”にあたる語は“bulrushers”となり、コーティション・マーク(“”)が付けられ強調されている。ハックにとって“bulrushers”とは、「ブルラッシャー家の人々」あるいは“bull+rushers”で「雄牛を駆りたてる人々、民族」と受け止めたと解釈できる。ハックにとって奴隷のような苦しみを味わっていた、イスラエル民族を解放したモーセのなかに、彼が日常見聞きする、黒人奴隷を家畜同然に扱う、奴隷所有者や奴隷商人から、奴隷を解放する人物の姿を見ていたと捉えることが可能であろう<sup>(16)</sup>。

自分の姪アニーをHFの未亡人に、彼女の聖書の読み聞かせに耳を傾けるハックをトウエインに置き換えてみると、HFの冒頭の「図7」のキャプション“LEARNING ABOUT MOSES AND THE ‘BULRUSHERS.’”には、8歳のアニーのエピソードが下地にあると捉えることができる。聖書の「モーセと葦」の話を少しも理解してくれないサム叔父さんのことを伝える、先に引用した手紙の“dull (物分かりが悪い)”なサム叔父さんの将来を心配するアニーに対して、トウエインは“*And I’m just as dull yet.*”と書き綴っている(MTL 1:180)。自己を笑いの対象としていることは、自身の戯画化でもある。さらに第11章の冒頭に付けられた、身元がわからないようにと女装したハックの挿絵(「図8」)からは、TAの口絵の女兒のようなモーセを想起させる。

パロディーとは、「ある作品やジャンルの特徴を模倣したり、元の作品の特徴をより砕いた文脈で再現することが、意外性と価値の下落を生じさせる」試みである<sup>(17)</sup>。その結果、元の作品のもつ既成の価値は笑いによる風刺とともに否定され、笑いをもって隠れている

真実が浮き彫りにされる。パロディーは、新しい価値観を生み出す梃の働きをするのである。

HF第1章にみることができるアニーとのやり取りのパロディー化は、聖書の教えを説くダグラス未亡人の「価値(観)を下落させ」、「Bulrushers」(奴隷所有者や奴隷商人たち)からの解放を思うハックの存在価値を高め、その重要性を示唆する働きをしているといえるであろう。またTAの口絵(「図5」)は、いわばフランスの画家ドラローシュの原画“MOSES IN THE ARK OF BULRUSHES”(「図6」)のパロディー画である。だが、「図5」のTAの口絵のキャプションに“DRALOCHE’S MOSES”とせずに“TIT-

図8 (HF p.68.)



IAN'S MOSES”としたことには、トウェインの意図があった。それは美術作品の鑑賞において巨匠であるということで、作品の真価を問おうとしない人々への警鐘であるだけでなく、*TA*を最後まで読み進んだ読者へトウェインの文学作品のもつユーモアの再評価を促すものでもある。ここに彼のパロディー画への試みが読み取れるといえよう。

## おわりに

1880年を境にトウェインの日本への関心は、それまでの友人ハウスやグレイとの交遊を通して得た情報と比較すると、質的に大きく変化する。それは、1880年夏に、若い日本人の養女を伴って日本から帰米したハウスとの再会に始まるといってもよいであろう。この時トウェインは日本人の養女に直接会うことはなかったようだが、彼女に対する関心は養父となったハウスの人間性を顧みることによって変わったと捉えることができる。それは、ハウスとの今後の友情の在り方への危惧の現れであり、第1節で考察したスーザン・ワーナーへの絵手紙の謎解きの中に示されている。

スーザンへの絵手紙に見るトウェインのパロディー嗜好は、1880年初夏に出版された*TA*の挿絵や口絵への操作に明らかである。この口絵に示された旧約聖書の「モーセと葦」については、彼が作家としてデビューする以前からの関心事で、1866年にはこの逸話をめぐる8歳の姪のアニーとのエピソードとして雑誌に発表された。その10年後の1876年夏に執筆が開始された『ハックルベリー・フィンの冒険』の第1章では、ダグラス未亡人が読み聞かせる聖書の葦（“the bulrushes”）を、ハックはアニーの方言の葦（“the bulrushers”）と聞き取る挿話に使われている。さらに*HF*第11章の冒頭に付けられた女装のハックの挿絵は、1884年の*HF*出版の直前に、E. W. Kemble (1861-1933)によって描かれたものだが、*TA*の口絵の女児とも見える「モーセ」を想起させる。これらの作品や表現の中に彼の日本への関心の一端を見いだすことはできないが、トウェインのパロディー嗜好や聖書の世界を描くヨーロッパ絵画の受容を考えるうえで重要なことである。

1880年前後に見られるトウェインの日本への主な関心は、前年に世界一周旅行で日本を訪問したグラント将軍に関連するものにある。日本での将軍の案内役を務め、自身が編集する*Tokio Times*に将軍の記事を何度も書いたハウスは、トウィッチェルのCEMの論文を*Tokio Times*に掲載したりもして、トウィッチェルとの繋がりを深めていた。トウィッチェルが日本や中国人へ開かれた心を持つ牧師であったからであろう。カリフォルニアでの記者時代には中国人移民の労働者たちを擁護する記事を書いたこともあるトウェインは、CEM運動が開始された時から、トウィッチェルの活動を友人として支えてきた。1880年夏のハウスの帰米後は、ハウスのジャーナリストとしての力量に頼む気持もあり、10月のハートフォードでの共和党大会にグラント将軍を招待するにあたっては、9月にボストン近郊のケンブリッジ在住のハウエルズも交えての会を持つことに努めた。そして12月には、CEM活動の継続のため、トウィッチェルを伴い、中国首脳への外交的・政治的な影

響力を持つグラント将軍との会見を果たしたのである。トウィッチェルの CEM 活動を支援するこうした積極的な行動を通して、トウェインの世界観は、日本を含む東洋への広がりを見せ始めたといえよう。

#### — Abbriations

HF: *Adventures of Huckleberry Finn*

MTL: *Mark Twain's Letters*

MTLE: *Mark Twain's Letters Electronic Volume*

MTP: *Mark Twain Papers/Project*

N&J: *Mark Twain's Notebooks & Journals*

SLC: Samuel Langdon Clemens

TA: *A Tramp Abroad*

#### — 注

- (1) 「和光大学表現学部紀要」第 20 号で考察した、グレイから借りて読んだ *The Loyal League* は、その後の調べで 1876 年にニューヨークで出版された仮名手本忠臣蔵の英訳 *Chushingura; or The Loyal League* であった可能性が高いのではないかということに気づいた。しかし、トウェインがグレイから借りた本の所在は依然として不明であるため、*The Loyal Ronins* (1880) との関連を検討するのは困難である。それ故、この件については、所在が明らかになった後の機会に譲りたい。また、本稿の第 1 節は 2009 年 8 月にアメリカの Elmira 大学で開催されたマーク・トウェイン国際会議での発表 “Twain’s Interest in Japan through His Friendship with Edward House around the 1870s” の一部について、日本語で補足・加筆したものである。
- (2) Mark Twain, *Mark Twain's Travels with Mr. Brown*, pp.173,176-77, 宮永孝『海を渡った幕末の曲芸団』i-ii 頁 (中公新書、1999 年)
- (3) *N&J volume II*, pp.304-305, 308.
- (4) Edward House の編集・出版による *Tokio Times* の [April 17, 1880, p.218.] には Yung Wing の記事、[May 29, 1880, pp.302-304.] にはトウィッチェルの論文を解説付きで載せている。
- (5) Cortney, *Joseph Hopkins Twichell*, pp.148-49. 1880 年 12 月 21 日のグラント将軍からの快諾、その後も将軍の尽力があったにもかかわらず、翌年 1881 年には CEM は終止という結果をみるようになった。
- (6) マーサからトウェインへの 1880 年 9 月 14 日付の手紙。手稿は MTP に所蔵。
- (7) 『日本女性人名辞典』9 頁には琴が結婚に失敗し自殺未遂の事件や実父・青木信寅についての記述がある。母に関しては、琴が 2 歳くらいのとき死去した事が琴の英作文 “The Story of My Life” のタイプアウトされた下書きに書かれている。(これは黒田家に保管されている； Huffman, p. 87)
- (8) MTP 所蔵の MTL 5: p.100. トウェインから二人宛の 1878 年 11 月 20 日付の手紙。
- (9) Cortney, et al. eds. *The Letters of Mark Twain and Joseph Hopkins Twichell*, p.82. n3.
- (10) 手稿は、エール大学 Beinecke Rare Book and Manuscript Library に所蔵。
- (11) *Tokio Times* の [July 5, 1879, pp.1-2,8.], [July 12, 1879, pp.17-18.], [July, 19, 1879, p.34.], [August 9, 1879, pp.70-71, 83.]. そのほかグラント将軍がアメリカへ帰国したあとには、“Grant Example” (September 20, 1879, p.166) や “General Grant and the Ryukiu Question” (October 11, 1879, pp.201-204) の記事を書いている。
- (12) 琴のマーガレット・グリフィス宛に書いた手紙 (下書き) の手稿。(黒田家に保管)
- (13) 大久保博「マーク・トウェインのモーゼ像について (1) — *A Tramp Abroad* における Titian’s Moses — 補遺」p.1 法政大学教養部『紀要』第 77 号外国語・外国文学編 (1991 年 2 月)。
- (14) David, *Mark Twain and His Illustrators*, Volume II (1875-1883), pp.155-156.)



- (15) 高島真理子「Huck Finn におけるパップの存在」和光大学人文学部『紀要』第 34 号 (1999)
- (16) 大久保博「マーク・トウェインのモーゼ像について (2) —*Adventures of Huckleberry Finn* における “Moses and the Bulrushers”—」pp.88-96. 法政大学教養部『紀要』第 81 号 外国語・外国文学編 (1992 年 2 月)。また、*Mark Twain Journal* Volume 27, (Spring, 1989) 号の裏表紙には、*TA* の口絵の操作に関する「モーセと葦」の「図 5」と「図 6」の 2 葉の挿絵が付けられ、大久保論文の研究結果が明記されている。
- (17) 雨宮俊彦『笑いとユーモアの心理学』86 頁。

—— 参考文献

- 雨宮俊彦 『笑いとユーモアの心理学』東京:ミネルヴァ書房、2016 年。
- アンベール、エメエ 茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』東京:講談社学術文庫、2004 年。
- Courtney, Steve. *Joseph Hopkins Twichell: The Life and Times of Mark Twain's Closest Friend*. Athens and London: University of Georgia Press, 2008.
- , et al. eds. *The Letters of Mark Twain and Joseph Hopkins Twichell*. Athens: University of Georgia Press, 2017.
- David, Beverly, R. *Mark Twain and His Illustrators*, Volume II (1875-1883). New York: Whiston Publishing Company, 2001.
- Harris, Joel Chandler. *Uncle Ramus*. Atlanta, Cherokee Publishing Company, 1981.
- Hirst, Robert H. gen.ed. *Mark Twain's Letters*. 6vols. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 1988-2002.
- Huffman, James L. *A Yankee in Meiji Japan: The crusading Journalist Edward H. House*.
- Mitford, A.B. *Tales of Old Japan*. 2vols. London: Macmillan, 1871.
- 宮永孝 『海を渡った幕末の曲芸団』東京:中公新書、1999 年。
- Rasmussen, R. Kent. *Mark Twain A-Z: The Essential Reference to His Life and Writings*. New York: Oxford University Press, 1995.
- Twain, Mark. *A Tramp Abroad*. New York: Oxford University Press, 1996.
- . *Adventures of Huckleberry Finn*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 2003.
- . *Mark Twain's Notebooks & Journals, Volume II (1877-1883)*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 1975.
- . *Mark Twain's Travel's with Mr. Brown*. ed. Franklin Walker & G. Ezra Done, New York: Alfred A. Knopf, 1940.
- 『日本女性人名辞典』日本図書センター、1998 年
- 『図録: フランス絵画の 19 世紀』日本経済新聞社、2009 年

—— 図版について

- 「図 1」MTLE 5: p.240.
- 「図 2」図録『フランス絵画の 19 世紀』p.199.
- 「図 3」*A Tramp Abroad*, p.123.
- 「図 4」『絵で見る幕末日本』p.268.
- 「図 5」TITIAN'S MOSES URL: [https://en.wikisource.org/wiki/A\\_Tramp\\_Abroad](https://en.wikisource.org/wiki/A_Tramp_Abroad)
- 「図 6」MOSES IN THE ARK OF BULRUSHES  
URL: <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015068377004&view=1up&seq=511>
- 「図 7」LEARNING ABOUT MOSES AND THE 'BULRUSHERS'  
URL: <https://www.marktwainproject.org/xtf/view?page=2&x=12&y=6&docId=works%2FMTDP10000.xml&doc.view=&style=work&brand=mtp#P>
- 「図 8」URL: <https://www.marktwainproject.org/xtf/view?page=68&x=0&y=0&docId=works%2FMTDP10000.xml&doc.view=&style=work&brand=mtp#P>